

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：12603

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K18500

研究課題名（和文）音韻獲得の言語相対論の新展開：クリック子音獲得の事例研究

研究課題名（英文）New Insights into Linguistic Relativity in Phonological Acquisition: A Case Study of Click Consonants

研究代表者

中川 裕（Nakagawa, Hirosi）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：70227750

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、クリック子音を豊富に持つグイ語における音韻獲得のプロセスを解明することを目的とする。ボツワナ共和国での現地調査により幼児のクリック子音獲得の一次資料を収集した。コロナ禍の影響で一部の調査は遅延したが、東京滞在中の母語話者の協力によりデータ分析を進めることができた。コロナの5類感染症への移行により、最終年度には現地調査も再開でき、さらにデータ収集を進めることができた。研究期間全体を通じて、クリック子音の獲得パターンに関する新たな知見を得るとともに、識字教育への応用も探求した。本研究の成果は、音韻獲得理論の発展に寄与するものであり、今後のさらなる研究発展が期待される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、クリック子音を多く含むグイ語の音韻獲得過程を詳細に解明し、音韻獲得理論の発展に寄与する点にある。クリック子音は非常に稀少であり、その獲得過程の研究は、普遍的な音韻理論に重要な示唆を与える。また、幼児のクリック子音獲得データは、音素体系の多様性とその獲得メカニズムの理解を進め、音韻獲得の困難さと容易さに関する新たな知見を提供する。「多数のクリック子音をもつコイサン諸語の音素体系を子供はどのように獲得するか？」という問題は未探求であり、本研究は世界初の組織的調査を実施し、その結果を考察した点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：This research aims to elucidate the process of phonological acquisition in G'ui, a language rich in click consonants. Primary data on the acquisition of click consonants by young children were collected through fieldwork in the Republic of Botswana. The COVID-19 pandemic caused delays in some research activities; however, data analysis was able to proceed with the cooperation of native speakers residing in Tokyo. The transition of COVID-19 to a Category 5 infectious disease allowed for the resumption of fieldwork in the final year, enabling further data collection. Throughout the entire research period, new insights into the patterns of click consonant acquisition were obtained, along with explorations into applications for literacy education. The results of this research contribute to the development of phonological acquisition theory and hold promise for further advancements in future studies.

研究分野：言語学

キーワード：クリック 音韻獲得 音韻論 コイサン 脱クリック化

1. 研究開始当初の背景

コイサン諸語は、多数のクリック子音を持つ極めて複雑な音素体系を特徴としている。このような複雑な音素体系を幼児がどのように獲得するかは、音韻獲得研究やコイサン言語学において未解決の重要な問題である。従来の音韻獲得研究は、主に欧米言語を対象にしており、音素体系が比較的単純な言語に焦点を当ててきた。そのため、「獲得の易しい」音類に関する知見は豊富にある一方で、「獲得の難しい」音類に関する研究はほとんど進んでいない。

本研究は、このギャップを埋めることを目的としており、コイサン諸語コエ・クワディ語族カラハリ・コエ語派のグイ語を事例とする。グイ語は、38個の非クリック子音音素と52個のクリック子音音素を含む90個の子音音素を持ち、世界の言語の中でも極端に多い部類に入る。さらに、グイ語の語彙においてクリック子音の頻度が非クリック子音を大きく上回っており、これらの音素の獲得は子供の語彙の拡大において重要である。

研究代表者は、予備調査からクリック子音の獲得過程に関する初期的な知見を得ている。この予備調査を基に、この研究課題では本格的な組織的調査を実施し、音韻獲得の理論に新たな視点をもたらすプロジェクトを構想した。本研究は、音韻獲得研究の射程を「獲得の易しい音類」から「獲得の難しい音類」へと拡大し、音韻獲得の言語相対性に関する新しい知見を提供することを目指している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、コイサン諸語コエ・クワディ語族の中で最もクリック子音の多いグイ語におけるクリック子音の獲得過程を体系的に解明し、音韻獲得理論に新たな視点を提供することである。従来の音韻獲得研究は、比較的単純な音素体系を持つ欧米言語に焦点を当ててきたため、複雑な音素体系を持つ言語における音韻獲得のメカニズムは十分に解明されていない。特に、クリック子音を含む複雑な音素体系を持つグイ語を身につけつつある幼児が、どのようにしてこれらの音素を獲得するのかを詳細に調査することは、音韻獲得の理論において重要な課題である。

本研究では、ボツワナ共和国ハンシー県ニューカデ村のグイ語を話す幼児を対象に、発音の録音・録画を行い、精密な音声分析を通じてクリック子音の獲得過程とその特徴を明らかにすることを目指す。具体的には、幼児の発音を引き出すために、主として「オウム返し発音タスク」を用い、得られたデータを詳細に分析することで、クリック子音の獲得時期、獲得順序、置換パターンなどを明らかにする。

また、調査対象の幼児から得られたデータを基に、クリック子音の獲得過程における一般的な傾向や個別的な特徴を抽出し、音韻獲得の理論に新たな知見を提供することを目指す。本研究は、「獲得の難しい音類」に関する新たな知見を得るだけでなく、音韻獲得の言語相対性（個別性・類型性）の理論を発展させることにも寄与する。

最終的には、これらの知見を基に、音韻獲得研究の射程を「獲得の易しい音類」から「獲得の難しい音類」へと拡大し、言語学的な議論に新しい視点をもたらすことを目指す。また、研究成果の一部は、将来的にグイ語の正書法やグイ社会における母語識字教育のための素材開発にも応用することで、実際の言語教育にも貢献することを目指す。

3. 研究の方法

本研究は、ボツワナ共和国ハンシー県ニューカデ村のグイ語を話す幼児を対象に、クリック子音の獲得過程を調査する。具体的な研究方法は以下の通りである。

まず、調査対象として2歳から5歳までのグイ語を話す幼児および保護者の数組の協力者を選定する。調査は、3年間にわたり経年調査を行う予定であったが、コロナ禍により、大幅に現地調査による資料収集が遅れた。その間、これまでの現地調査で集めた他の資料に収録されている幼児発音を再発見して編集、データセット化する作業と、東京に滞在中のグイ語話者家族（5歳児を含む）への聞き取り調査により関連する資料の収集作業を進めた。研究期間延長後の最終年度には、コロナ5類感染症移行に伴って、現地調査が可能となり、動画録画を含めた資料収集を完了することができた。

幼児の発音データを収集する方法としては、「オウム返し発音タスク」が最も効率よく体系的なデータセットの作成が可能であった。それを補って、「歌唱タスク」も使用した。また、最終年度には、準備した物語紙芝居アニメを子供に見せて反応を探る新しい手法の予備調査も行った。「オウム返し発音タスク」では、90子音音素を網羅する180単語のリストを用いて、幼児に単語をオウム返しに発音させる。「歌唱タスク」では、子どもが知っているグイ語の歌の一部を幼児に歌わせ、発音を引き出す。

発音データの収集は、主に直接の調音観察と録音を用いた。収集した録音データは、音声分析ソフトウェアを用いて精密に分析した。具体的には、クリック子音の獲得時期、獲得順序、置換パターンを詳細に解析し、幼児の音韻発達のメカニズムの解明を試みた。また、クリック子音の代用として用いられる非クリック子音のパターンを分析し、その音韻論的な影響を考察した。

さらに、現地調査中は、幼児とその養育者とのインタラクションも観察し、自然な会話の中での発音データを収集した。これにより、フォーマルなタスク以外の発音データも補完的に収集し、より包括的な分析を可能にした。

4. 研究成果

本研究の成果には、本来の研究目的に沿うコイサン諸語のグイ語を話す幼児におけるクリック子音の獲得過程の体系的な理解という側面と、音韻獲得理論への新たな視点提供という側面がみとめられる。以下に主要な研究成果について述べる。

(1) 主な成果と発見

クリック子音の獲得過程の解明：グイ語の幼児（2歳から5歳の男女計6人）を対象にした調査の結果、クリック子音の獲得には一定のパターンが見られることが判明した。特に、クリック子音の非クリック子音による代用（脱クリック化）と、クリック流入音の調音の安定性に変異があることが観察された。

脱クリック化の規則性：幼児の発音において、話者を横断して、13種類のクリック系列のうち、代用が見られる系列と見られない系列が明確に区別された。特に、鼻音性を持つ3つの系列は他の10系列に比べて脱クリック化しない段階の幼児が多かった。言い換えると、鼻音的な3つの系列は、早期に獲得される傾向が見られた。この鼻音性の音韻的地位は、弁別的な1系列と音声詳細的な2系列を通して認められた。これらの系列は、代用の有無に基づく階層性における特別な位置を示しており、鼻音性が全話者事例においてクリック子音獲得において重要な役割を果たしていることが初めて音韻獲得の観察から示唆された。

クリック流入音の調音的不変性：幼児の発音におけるクリック流入音の安定性には、流入音タイプによって傾向としての違いが見られた。具体的には、歯茎クリック (!) は最も不変性がみとめられ、側面クリック (||) は最も不安定で、個人内で音色に変異がある話者が認められた。これを調音的不変性の階層として認定するためには、まだデータサイズが十分ではない。したがって、これは今後の重要な調査課題の一つとなる。

(2) 分析結果の要点

クリック子音の非クリック子音による代用（脱クリック化）：調査結果によると、クリック子音の代用には規則的なパターンが観察された。例えば、無声無気音のクリック子音は、対応する無声無気音の非クリック子音 (k) で代用されることが多かった。この代用パターンは、調音点や調音方法の違いによって分類され、体系的に理解することができた。そして、それは、複雑クリック子音を単一音素と分析するか、音素連続と分析するか、というコイサン音韻論における未解決の論争の文脈で、音素連続分析を支持し、この論争にひとつの解を与える新しい根拠をもたらした。

鼻音性系列の優先獲得：鼻音性を持つ下記の3つの系列は、非鼻音性の系列に比べて早期に獲得される明らかな傾向が認められた。

- | | | | | |
|-----|----|----|----|---|
| (a) | ɔ | ɔʔ | ɔ! | ɔ |
| (b) | ɪʔ | ʔʔ | !ʔ | ʔ |
| (c) | h | ʔh | !h | h |

これら3系列のうち(a)の鼻音性は弁別的であるが、(b)(c)がもつ鼻音性は、音声詳細である。このように音韻的地位に差はあるが、鼻音性をもつクリックの獲得は早いのはなぜかが問題となる。これは音声生理学的な説明（口蓋舌筋が鼻音とクリックの調音的リンクとなるという説明）が可能だろうという見通しをもっている。

音韻獲得の階層性：調査結果に基づき、クリック子音の獲得における階層性が存在することが示された。具体的には、鼻音性を持つ系列（5, 6, 7番）が早期に獲得され、続いて非鼻音性系列（その他の系列）が獲得される。この階層性は、音韻獲得のプロセスにおいて、特定の音声的特徴が優先されることを示している。

流入音の不変性：調音の不変性について、流入音タイプによる違いが見られる話者を詳細に観察すると、歯茎クリック (!) は比較的不変的に調音されるのに対し、側面クリック (||) は調音の不変性に欠けることが多かった。もしも、今後の調査により、同様な傾向がみられる話者が多数認められると、これはどのように説明できるかが問題となる。現時点での見通しとしては、これは、調音点（歯茎 vs. 側面）や調音方法（破擦性の有無など）の性質（たとえば調音的な複雑さや聴覚的な明瞭性）の違いに起因すると考えることができるかもしれない。

(3) 新たな知見と理論的貢献

本研究の成果は、以下の点で音韻獲得理論に新たな視点を提供するものである：

音韻獲得における音声的特徴の役割：鼻音性という特定の音声的特徴が、その音韻論的地位の如何にかかわらず、クリック子音の獲得において重要な役割を果たすことを示した。

クリック子音の獲得過程の理解：クリック子音の獲得過程における代用パターンや調音の安定性に関する新たな知見を提供した。

コイサン音韻論の論争への貢献: 複雑クリック子音をどのように音韻分析するかというコイサン音韻論における未解決問題にたいして、音素連続分析を支持する新しい根拠をもたらした。

理論的フレームワークの提案: クリック子音の獲得に関する階層性のフレームワークを提案し、音韻獲得理論の射程を拡大した。

実用的応用: 研究成果の一部は、グイ語の正書法や識字教育のための素材開発にも応用される。具体的には、幼児がクリック子音を獲得する過程で観察されたパターンを基に、より効果的な識字教育プログラムを開発することが可能である。これにより、実際の言語教育にも貢献することが期待される。

(4) 結論

本研究は、グイ語の幼児が複雑なクリック子音をどのように獲得するかを詳細に解明し、音韻獲得理論に新たな知見を提供した。これにより、音韻獲得の言語相対性に関する議論が飛躍的に進展することが期待される。また、研究成果は実用的な応用も可能であり、言語教育にも貢献することができる。今後も継続的にデータを収集し、さらなる分析を進めることで、音韻獲得理論の深化を図る予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計31件（うち査読付論文 16件／うち国際共著 5件／うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 Nakagawa, Hiroshi, Alena Witzlack-Makarevich, Daniel Auer, Anne-Maria Fehn, Linda Gerlach Ammann, Tom Gueldemann, Sylvanus Job, Florian Lionnet, Christfried Naumann, Hitomi Ono, Lee J. Pratchett	4. 巻 -
2. 論文標題 Towards a phonological typology of the Kalahari Basin Area languages	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Linguistic Typology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/LINGTY-2022-0047	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 松平勇二・中川裕	4. 巻 NA
2. 論文標題 カラハリ狩猟採集民グイ人の歌	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 山口裕之・橋本雄一編『地球の音楽』東京外国語大学出版会	6. 最初と最後の頁 163-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤 幹治, 中川 裕, 大野 仁美	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料：受動表現	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 335-341
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤 幹治, 中川 裕, 大野 仁美	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料：アスペクト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 343-352
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 加藤 幹治, 中川 裕, 大野 仁美	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料: モダリティ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 353-360
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤 幹治, 中川 裕, 大野 仁美	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料: ヴォイスとその周辺	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 361-369
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村 公彦, 中川 裕, 大野 仁美	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料: 他動性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 371-388
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村 公彦, 中川 裕, 大野 仁美	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料: [連用修飾的]複文	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 389-398
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また, その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村 公彦, 中川 裕, 大野 仁美	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料: 情報表示の諸要素	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 399-407
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村 公彦, 中川 裕, 大野 仁美	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料: 所有・存在表現	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 409-417
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安藤寿康・明和政子、橋彌和秀、亀井伸孝、中尾 央、長谷川真理子、高田 明	4. 巻 58
2. 論文標題 教育の生物学的基盤: 進化か文化か	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 284-290
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5926/arepj.58.284	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2020年3月号
2. 論文標題 子育ての自然誌: 狩猟採集社会からの眼差し(二四): 子育ての危機再考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2020年2月号
2. 論文標題 高田 明 (2020). 子育ての自然誌: 狩猟採集社会からの眼差し(二三): 社会変容と社会化(1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2020年1月号
2. 論文標題 高田 明 (2020). 子育ての自然誌: 狩猟採集社会からの眼差し(二二): 遊びから仕事への移行	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2019年12月号
2. 論文標題 子育ての自然誌: 狩猟採集社会からの眼差し(二一): 歌・踊り活動における参与枠組みと関与	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2019年11月号
2. 論文標題 子育ての自然誌: 狩猟採集社会からの眼差し(二〇): 集団活動における社会化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2019年10月号
2. 論文標題 子育ての自然誌: 狩猟採集社会からの眼差し(十九): 「文化学習」再考	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2019年9月号
2. 論文標題 子育ての自然誌: 狩猟採集社会からの眼差し(十八): 第二次間主観性の成立と模倣	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2019年8月号
2. 論文標題 子育ての自然誌: 狩猟採集社会からの眼差し(十七): 共に「話す」ことと「うたう」こと	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2019年7月号
2. 論文標題 子育ての自然誌: 狩猟採集社会からの眼差し(十六): 共同注意の発達と初期音声コミュニケーション	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2019年6月号
2. 論文標題 子育ての自然誌：狩猟採集社会からの眼差し（十五）：生得的コンピテンスと周囲からの働きかけ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2019年5月号
2. 論文標題 子育ての自然誌：狩猟採集社会からの眼差し（十四）：乳児の反射を利用した養育行動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 2019年4月号
2. 論文標題 狩猟採集社会からの眼差し（十三）：養育者-子ども間相互行為の発達	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ミネルヴァ通信「究」	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 -
2. 論文標題 文化の中で育つ・育てることと音楽	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本音楽教育学会(編), 音楽教育研究ハンドブック	6. 最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Takada, Akira	4. 巻 -
2. 論文標題 Diversity in child-rearing practices among the San: Characteristics of gymnastic behaviour among the G ui/G !ana	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 K. Beyer, G. Boden, B. Koehler, & U. Zoch (Eds.), Linguistics across Africa: Festschrift for Rainer Vossen	6. 最初と最後の頁 335-348
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高田明	4. 巻 -
2. 論文標題 子どもと大人: 私たちの来し方、行く先を見つめ直す	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 松村圭一郎・中川理・石井美保(編), 文化人類学の思考法	6. 最初と最後の頁 140-151
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakagawa, Hiroshi	4. 巻 98
2. 論文標題 Linguistic and music ethnography of Kalahari Khoe	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Area and Culture Studies	6. 最初と最後の頁 191-202
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15026/93959	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Witzlack-Makarevich, Alena, Nakagawa Hiroshi	4. 巻 -
2. 論文標題 Linguistic Features and Typologies in Languages Commonly Referred to as 'Khoisan'	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 H. Ekkehard Wolff (ed.) The Cambridge Handbook of African Linguistics	6. 最初と最後の頁 382-416
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/9781108283991.012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 GUELDEMANN, Tom, NAKAGAWA, Hirosi	4. 巻 24
2. 論文標題 Anthony Traill and the holistic approach to Kalahari Basin sound design	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Africana Linguistica	6. 最初と最後の頁 45-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2143/AL.24.0.3285491	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Vladimir Bajic, Chiara Barbieri, Alexander Huebner, Tom Gueldemann, Christfried Naumann, Linda Gerlach, Falko Berthold, Hirosi Nakagawa, Sununguko W. Mpoloka, Lutz Roewer, Josephine Purps, Mark Stoneking and Brigitte Pakendorf	4. 巻 167
2. 論文標題 Genetic structure and sex-biased gene flow in the history of southern African populations.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 American Journal of Physical Anthropology	6. 最初と最後の頁 656-671
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/ajpa.23694	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Witzlack-Makarevich, Alena & Hirosi Nakagawa	4. 巻 -
2. 論文標題 Linguistic features and typologies in languages commonly referred to as 'Khoisan'	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 In Ekkehard Wolff (ed.), The Cambridge Handbook of African Linguistics	6. 最初と最後の頁 382-415
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計22件 (うち招待講演 5件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 Nakagawa, Hirosi
2. 発表標題 A phonesthemic vowel feature in G ui
3. 学会等名 KBA Riezlern 2022 (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中川裕
2. 発表標題 コイサン諸語のクリック子音の音韻分析：SPEと単一音素分析の系譜
3. 学会等名 日本英語学会第40回大会 特別シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Lee Pratchett, Alena Witzlack-Makarevich, Linda Ammann, Daniel Auer, Anne-Maria Fehn, Tom Guedemann, Sylvanus Job, Florian Lionnet, Christfried Naumann, Hitomi Ono, Hirosi Nakagawa
2. 発表標題 Typological features of Consonants in Khoisan languages of the Kalahari Basin Area
3. 学会等名 Francqui International Professorship Symposium: The Diversity and Documentation of Speech Sounds in Languages of the World (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中川 裕, 木村 公彦
2. 発表標題 カラハリ狩猟採集民のための持続可能な識字活動基盤：スマートフォンとSNSを用いたグイ語正書法の普及と企画
3. 学会等名 日本アフリカ学会第58回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中川裕
2. 発表標題 多数のクリック子音をもつ言語は音韻体系をどう組織化するか：“コイサン”諸語の子音・母音・音素配列
3. 学会等名 日本音声学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中川裕
2. 発表標題 World Color Surveyとコイサン色彩語
3. 学会等名 日本フランス語学会2021年度談話会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中川 裕, 加藤 幹治, 木村 公彦
2. 発表標題 菅原データ：初のコイサン自然会話コーパス
3. 学会等名 日本言語学会第163回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kimihiro Kimura, Hirosi Nakagawa
2. 発表標題 Grammatical Relations in the Kalahari Basin Area
3. 学会等名 The second meeting of ILCAA Joint Research Project “Studies in Asian and African Geolinguistics”
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kimihiro Kimura, Hirosi Nakagawa
2. 発表標題 Animal vocabulary in the Kalahari Basin Area
3. 学会等名 The third meeting of ILCAA Joint Research Project “Studies in Asian and African Geolinguistics”
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中川裕, 木村公彦
2. 発表標題 カラハリ狩猟採集民のための持続可能な識字活動基盤
3. 学会等名 日本アフリカ学会第58回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高田明
2. 発表標題 人類学から考える子守唄と遊戯的な歌：南部アフリカのサンにおける養育者-子ども間相互行為の事例から
3. 学会等名 日本赤ちゃん学会第19回学術集会プレコンgres「子守唄を歌うのは誰 寝かすことと寝ること」における話題提供（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takada, Akira
2. 発表標題 Caregiver's vocal and embodied responses to infant crying among the !Xun of north-central Namibia
3. 学会等名 the 16th International Pragmatics Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高田明
2. 発表標題 環境に連結したジェスチャーと指示詞：グイ / ガナの道探索実践の事例から
3. 学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takada, Akira
2. 発表標題 Cultural diversity and universality in infant-caregiver interaction: Evidences from the San of southern Africa
3. 学会等名 the 2019 SPA Biennial (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Witzlack-Makarevich, Alena and Hiroshi Nakagawa
2. 発表標題 Khoisan phonological typology database and the relative frequencies of consonants in the Khoisan languages
3. 学会等名 13th Conference of the Association for Linguistic Typology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nakagawa, Hiroshi
2. 発表標題 History of tonal interaction across paradigms: new findings from Khoisan tonology
3. 学会等名 International Conference on Historical Linguistics (ICHL24) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川裕
2. 発表標題 カラハリ狩猟採集民の言語におけるユニークな音象徴
3. 学会等名 日本アフリカ学会第56回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中川裕、アレナ・ウィツラック=マカレヴィチ、木村公彦
2. 発表標題 言語音の限界縁：カラハリ言語帯音韻類型論
3. 学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中川 裕
2. 発表標題 カラハリ狩猟採集民の言語における飲食動詞の類型論的特徴
3. 学会等名 日本アフリカ学会第55回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川 裕
2. 発表標題 声調交替のパラディグマティックな説明：グイ語における2つの畳語パラダイムの相互作用音韻史
3. 学会等名 日本言語学会第156回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中川 裕
2. 発表標題 くちあたりの音象徴の言語相対性と普遍性：コイサン事例研究
3. 学会等名 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第25回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakagawa, Hirosi
2. 発表標題 Click acquisition in G ui
3. 学会等名 The 9th World Congress of African Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Jiro Tanaka	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Kyoto University Press & Trans Pacific Press	5. 総ページ数 258
3. 書名 Bushman Folktales: a collection of G ana myths and fables	

1. 著者名 Nakagawa, Hirosi and Andy Chebanne (eds.)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Ruediger Koeppel Verlag	5. 総ページ数 318
3. 書名 [Anthony Traill's posthumous manuscript] A Trilingual !Xoo Dictionary: !Xoo-English-Setswana.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------